

和歌山大学 図書館史

2019年3月



前身校の時代



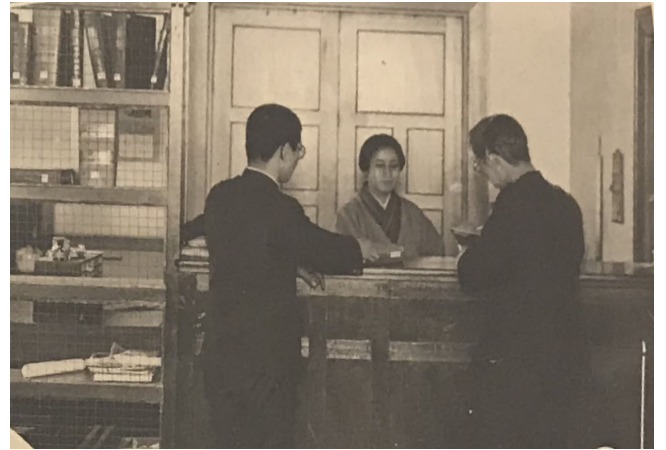
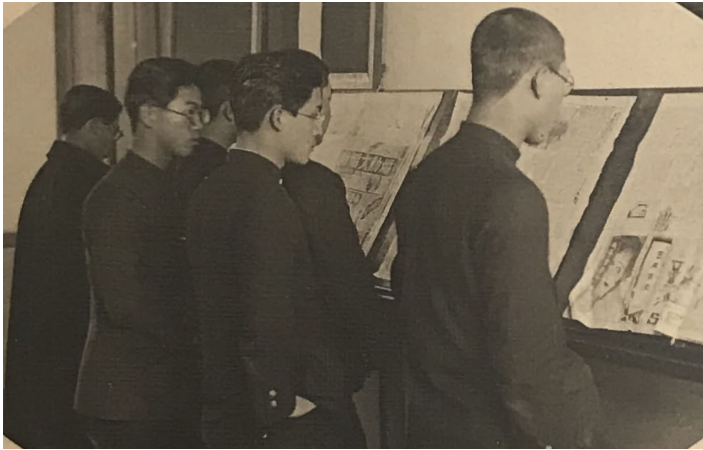
和歌山県師範学校 男子部図書閲覧室、女子部自習室（大正4年）／『100年のあしあと』



和歌山高等商業学校 図書閲覧室／『和歌山大学経済学部五十年史』



和歌山高等商業学校 図書課／卒業アルバム（1931）



和歌山高等商業学校 図書館／卒業アルバム (1931)

中央館、真砂町分館時代



中央館／『和歌山大学経済学部五十年史』



真砂町分館／『100年のあしあと』



中央館書庫（昭和47年頃）



中央館書庫内部／『和歌山大学十年の歩み』



真砂町分館閲覧室／『和歌山大学十年の歩み』

移転、統合後（栄谷）



1階ロビー



2階閲覧室（平成4年）

現況



ラーニング・commons



新棟



ベーカリーカフェ

目次

1	前身校の時代（1872年～1949年）	
1.1	師範学校の開設	1
1.1.2	図書館の設置	1
1.1.3	紀州藩文庫	2
1.2	和歌山高等商業学校の開設	3
1.2.2	寄贈	3
1.2.3	図書館の概要	4
1.2.4	戦争と和歌山経専への転換	5
2	和歌山大学の設立（1949～1959年）	
2.1	創設の頃	7
2.2	初代図書館長北川宗蔵	7
2.3	規則	9
2.4	体制	9
2.5	図書館委員会	10
2.6	収書	10
2.7	和歌山大学新聞に見る当時の図書館	11
3	中央館、真砂町分館時代（1960～1987年）	
3.1	サービス	12
3.2	施設・設備	14
4	栄谷キャンパス時代（1987～2009年）	
4.1	キャンパス移転、図書館の統合	17
4.2	新図書館施設・設備計画	18
4.3	図書館報『阿佐毛』の創刊	19
4.4	電子化、情報化	20
4.5	図書館の増築	21
4.6	地域との連携	21
5	近年の図書館改革（2010～）	
5.1	和歌山大学行動宣言	22
5.2	「クロスカル図書館」構想	23
5.3	新棟（増築棟）の整備	25
5.4	蔵書整理と配架の見直し	25
5.5	資料保存体制の見直し	26
5.6	学生との協働	27
5.7	資料の選定	28
5.8	資料・情報へのアクセス改善及び計画の策定	29

5.9 紀州材を使用した図書館家具の研究	30
5.10 大学史資料室の設置	31
おわりに	31
参考文献	32

【資料】

- 資料 1 図書館年表
- 資料 2 前身校規程
- 資料 3 大学設立時の図書館規程
- 資料 4 歴代図書館長、事務長
- 資料 5-1 図書館委員会議題（昭和 24—平成 15 年度）
- 資料 5-2 図書館企画運営委員会議題（平成 16—29 年度）
- 資料 6 統計

1 前身校の時代（1872年～1949年）

1.1 師範学校の開設

和歌山大学は、1949（昭和24）年5月、学芸学部（現・教育学部）・経済学部の2学部からなる新制大学として設置された。しかし、本学の前身には、1875（明治8）年に設置された和歌山県師範学校及び1922（大正11）年に設置された和歌山高等商業学校に始まる長い歴史がある。

1791（寛政3）年、第10代紀伊徳川治宝は城下町の一画に藩校「学習館」を設立した。学習館は1856年に岡山（現吹上1丁目）へ移された後、明治新政権下の1869年に新たに「兵学寮」が設けられたことにより城内に移転し、兵学寮が岡山の地を全面利用することとなった¹⁾。廃藩置県後、新和歌山県は、1872（明治5）年1月、旧和歌山藩の学習館を廃し、「県学」を岡山元兵学寮跡に設けて、皇・漢・洋の三学舎を開いた。その後、学制頒布により県学を廃止し、「岡山小学」が開設される等の変遷を経て、1875（明治8）年5月4日、和歌山県師範学校とした。その後、1880（明治13）年に和歌山師範学校に改称、本科生65人、予備科生25人を定員とし、在学期間2か年半、生徒は16歳以上30歳以下とした。1883（明治16）年には高等師範学校学科を置き、生徒定員200人とした²⁾。

1.1.2 図書館の設置

師範学校において、図書室がいつ、どのように開室されたのかは定かではないが、明治12年度予算には、書籍購求費として「金百六拾圓」とある。また明治17～18年の状況として、「教室の如きは僅かに133坪を有するのみにて又特別教室の設備等ならず・・・」とあり、この頃にはまだ独立した図書室は設置されていなかったようである。図書については、「図書は藩学のものを引きつぎし以て割合に多く殊に漢籍には珍しきもの多かりき」とあるが³⁾、これらは後に紀州藩文庫として整理された。

その後、明治30年度の状況として、「教場は普通教室の外に地理歴史習字図書化学博物手工音楽等の特別教室を備へ」とあり⁴⁾、この頃までには図書室が整備されていた。明治33（1900）年10月には、従来の書籍庫を廃し、図書室及び書籍庫を建築している⁵⁾。明治35年以降に策定された『和歌山縣師範學校内規』によれば、「圖書ニ關スル内規」、「圖書閲覧者心得」、「圖書保管者心得」が定められていた。



書籍貸渡簿 和歌山県尋常師範学校 明治21年10月

校友会の発行した『會誌』によると、生徒用の図書室は寄宿舎内にあり、図書部の生徒たちが整理等を担っていたようである。第 17 号（大正 12 年）には、図書部の報告として、「通学制度となったこととて全くこの方面に無経験な私等はこの図書室を守っていく責任をおわなければならなくなりました」とあり、学期の初めに大整理を行なったこと、漱石全集全 14 巻を購入したことが述べられている⁶⁾。

第 25 号には、1928（昭和 3）年当時の状況として、「三寮の寮長室の二の間三段に成った棚に横になり、或は斜めに傾き、頗る疎らに本が置かれて有ると、舎監室の本棚の中に文学の全集物が三四十冊あるのみで大小合わせても四百冊と有るまいと思われる程貧弱なもの」とある。2 学期に入ると新しい棟が建ち、初めて図書室らしいものとなり、昭和 7 年には、蔵書も 2 千冊近くになった。ただし、寄宿舎の附属物のような位置にあるため、通学生には不便であり、「図書館の設立の一日も早からん事」が望まれていた⁷⁾。

一方、1930（昭和 5）年代より全国の師範学校で郷土教育が盛んとなり、師範学校、女子師範において 1931（昭和 6）年に、図書室とは別に郷土室が整備されるとともに、1934（昭和 9）年には、それぞれにおいて『本校郷土室目録』『郷土研究資料目録』が作成された⁸⁾。

その後、1949（昭和 24）年の大学昇格を前に、当時の図書課長松下忠教授を中心として、旧銃器庫を改装して閲覧室、書庫を作ったが、それらの費用の調達のために、全校生徒が休暇中に鉛筆販売のアルバイトを行なって協力したという⁹⁾。

1.1.3 紀州藩文庫

本学が所蔵する「紀州藩文庫」は、藩校廃止の後、蔵書を「和歌山縣學」へ引き継いだとする記載が『南紀徳川史』にあったため、紀州藩伝来の書籍と言われてきた。藩内にあった藩校「學習館」「紀伊國學所（古學館）」「兵學所」の蔵書の大部分に加え、「田丸城文庫」「若山醫學館」「松坂學問所」等の一部も「和歌山縣學」等を経て、師範学校に引継がれたもので、江戸藩邸の「明教館」「江戸國學所（古學館）」が所蔵した蔵書の一部も含まれる。

戦後の学制改革によって、和歌山大学教育学部（当時学芸学部）が継承し、その後同構内にあった附属図書館眞砂町分館に収蔵され、松下忠教授により「紀州藩文庫」として再整理が行われた。なお、近年の調査によれば、江戸時代以前の書籍の比率は、時期不明のものを除いて 63%以下であった¹⁰⁾。紀州藩文庫に近現代の蔵書が含まれる理由は、現在のところ明らかではない。なお、紀州藩文庫は 1972～1974（昭和 47～49）年度に全てマイクロフィルムに収め、劣化のため 2005（平成 17）年から翌年にかけて複製を作成した。

1.2 和歌山高等商業学校の開設

原内閣の高等教育機関拡張計画が発表されたことを契機に、高等商業学校が第 7 から第 13 まで増設されることとなり、この第 10 が本校の前身である和歌山高等商業学校であった。1922（大正 11）年 10 月 21 日、勅令 441 号を以って文部省直轄学校官制が公布され、和歌山高等商業学校が誕生した。翌大正 12（1923）年 4 月 23 日には、165 名の入学者を迎え、第 1 回入学宣誓式が挙行されているが、講堂は工事の途中であったため、式場には図書閲覧室が充てられた。

初代岡本一郎校長は、開校にあたり、第一は「人」だと考え、教職員の招聘に奔走するとともに、教授生徒の研究勉学を奨励するためにはまず図書館を充実しなければならないとして、図書館の充実を最重要課題とした。『和歌山高商十年史』によれば、1923（大正 12）年度の図書購入費として約 2 万円の予算が充当され、教職員は各自予算の一部分を配当されて「自由にどしどしと」図書を購入した。初めは書庫もなく、初代図書課長の小野鐵二教授が給仕一人とその整理に忙殺されていたが、6 月に赤井氏が来任し、7 月には書庫が完成、10 月の学期試験前に図書館が開館した。開校 3 年目の図書課の職員には、赤井氏が去った後に鈴木書記、近藤、高橋、森部の諸氏があった¹¹⁾。

1923（大正 12）年度の『和歌山高等商業学校一覧（第一年度）』の第六には、図書課所管として、「図書閲覧規程」、「図書帯出規程」、「教科用其ノ他公務用圖書帯出規程」、「校外者圖書閲覧規程」、「図書購入規程」、「寄贈圖書取扱規程」、「寄贈雑誌新聞取扱規程」、「圖書寄託規程」、「圖書点検規程」、「圖書課報告規程」が掲載されている。

1.2.2 寄贈

1925（大正 14）年度をもって創設費の予算がほぼ打ち切りとなり、物品購入に充てる経費が激減した頃、島村富次郎氏から図書の寄贈があった。島村氏は「鈴虫ポマード」等の化粧品の店主であった資産家で、本校の山本勝市教授と親交があり、同教授の橋渡しによるものであった。島村氏は、高商創立に際して 3 千円の寄附をするのみならず、1926（大正 15）年、1927（昭和 2）年の両年度にわたり、図書費として現金 1 万円を寄附した。この「島村資金」をもって海外に出たのが、岩城忠一、山本勝市教授で、山本教授がこの資金によって購入した図書の中には、ディドロとダランベールの編集による『百科全書』等がある¹²⁾。

なお、これら購入図書の冊数と価格は次の通りであった。

和漢書：2,378 冊 価格：206,996 円

洋書：1,350 冊 価格：847,356 円

以上の図書は、1928（昭和 3）年の『島村富次郎氏寄贈図書目録』に集録され、目録完成を祝い、島村氏を主賓に吉田彦一、前田辰之助、松居善助、橘田太郎、加藤清、小笠原誉至夫の諸氏を招いて晩餐会が催された。



島村富次郎氏寄贈圖書目録 / 和歌山高等商業学校[編]

次いで大正 5 年 3 月、元広東総領事田村幸策氏から、主として政治、法律、経済等に関する和洋書計 168 冊の寄贈があった。

昭和 3 年 2 月には、図書購入資金として、小切手 120 円が匿名の人から寄贈された。これは、その頃翻刻された『群書類従』を購入するか、既に所蔵があれば他の図書を購入してもらいたいという条件付きの資金であったが、すでに所蔵されていたため、協議の結果、和書 15 冊を購入した。

同じ月には、大阪市の田中譲氏から、主として経済学に関する図書 258 冊（価格 1,050 円）の寄贈があった。田中氏は山本勝市教授の郷里の先輩で、同教授の在外研究中、自由に図書を選択させておいて、これを本校に寄贈したものである¹³⁾。新聞 1 か月の購読料が 1 円という時代に、1,000 円という大金を教授に与え、教授がそれによって選択、購入した図書を自動的に高商図書館へ寄贈されるという形式をとった。その結果、258 冊もの図書が、1928（昭和 3）年 2 月に図書館に納入された。その中のひとつに、珍本『架空旅行記集成』が含まれている¹⁴⁾。

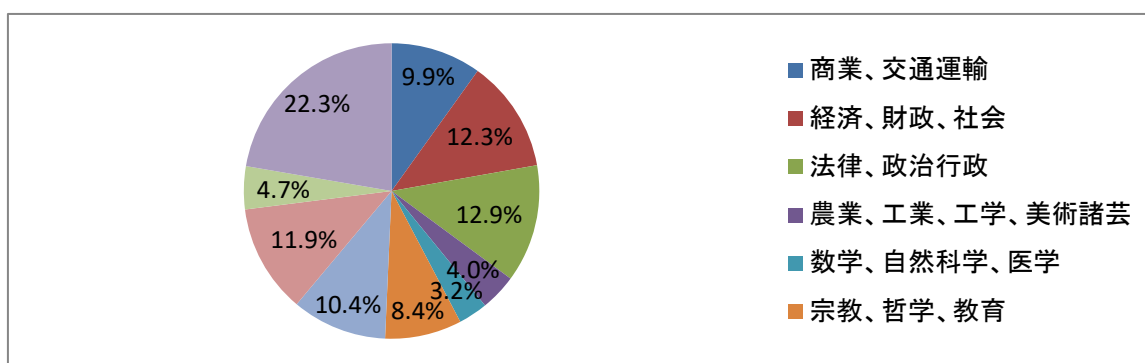
1.2.3 図書館の概要

図書館は、書庫を別として、簿記教室、消費組合事務室、産業研究部事務室と共に、木造 2 階建て 1 棟を構成し、階下の事務室 20 坪、階上の目録室兼出納所 25 坪、一般閲覧室 45 坪、職員閲覧室 40 坪、館内廊下及び渡り廊下からなっていた。書庫は鉄筋コンクリ 3 階建て 66 坪のもので、固定書架、可動書架、貴重書架等を設備していた。狭隘化により、昭和 8 年 12 月に増築した（75 坪・内部積層 3 階建、後の第 2 書庫）。

館員は課長（教授）、司書部員 4 名、出納部員 2 名（内 1 名出納手）及び給仕 1 名。図書の収集は主として、本校職員の要求に基づき、図書課長が統一的にその選択をした。図書収集整理は、一時図書課と産業研究部で二元的に行われていたが、昭和 7 年度以来、図書課で統一されることとなった。閲覧室は、午前 8 時から午後 9 時まで開館した。職員の帯出にも冊数、期間共にそれぞれ制限はあるが、教科用、校務用の帯出ならばほとんど制限

をつけず、生徒の館外利用のために暫定的に週末貸出制も実施していた。

図書館の充実は経営方針の主要なものの一つであり、他の経費を節減して図書の購入が重点的におこなわれた。『和歌山高商十年史』には、「本校の自動車が古色蒼然、和歌山市内の一名物となっているのも、或る程度まで、その一例とすることができよう」とあり、校務用自動車の買い替えも控えて図書購入に充てたようである。蔵書は昭和7年度末現在で34,562冊であったが、これは全国高商中、山口、小樽、長崎に次いで第4位を占めていた。また、これを生徒数で割ると1人当たり73冊弱で、山口、小樽に次ぐ第3位であった。蔵書の部門別構成は、次のとおりである。



利用状況については、常に約3,000冊の図書が帯出されている他、職員閲覧室に備え付けられた参考書架及び雑誌棚のものが自由に閲覧できた。生徒の館内閲覧数には年によって大きい差があり、毎年全国高商中の中位を上下していた。1932（昭和7）年度は、休日中の開館期間を通じ、利用者数が1日平均25人強、貸出冊数が50冊弱であった。特に試験期は閲覧室（席数80）が常に満員続きであったが、休日には一人の閲覧者もない日があった。目録室に掛けてある新聞雑誌の閲覧は、授業休みの間、いつも押すな押すなの盛況であったが、昭和5年度以来開設している閲覧相談事務は、利用法の知識が徹底していなかったためか、あまり活用されていなかった¹⁵⁾。

1.2.4 戦争と和歌山経専への転換

1941（昭和16）年、太平洋戦争に突入すると、街には「愛国行進曲」「軍艦マーチ」があふれ、学園も戦時色に塗りつぶされていった。1944（昭和19）年に入ると、学徒動員により、生徒は交代で尼崎の軍需工場に動員され、教職員もまた付き添い監督に駆り出された。

1944（昭和19）年3月31日、「非常時」「国策」の名のもとに、和歌山高等商業学校が和歌山経済専門学校と改称、さらにこの年は生徒を募集せず、和歌山工業専門学校（電気科、機械科）が新設された。1945（昭和20）年7月9日には、和歌山大空襲により全市の大半が灰燼に帰したが、本校は炎上を免れた。

9月末日に至り、連合軍の命によって本館を除く校舎運動場等が接收され、24時間以内に立ち退くよう厳命があった。急遽、学生、職員を総動員して、図書館の蔵書全部を教室に運び込む作業に従事した。鉄骨の書架は取り外しに手間取り、ガスによって焼き切るといふ緊急手段に訴えて、やっとの思いで学校の大半を明け渡した¹⁶⁾。『柑蘆』第13号に掲載された卒業生の座談会には、「進駐軍が来るということで、図書館をあけるということになったと思うんですけども、まあはっきり覚えていませんがずいぶん本を出しましたよ」と当時の思い出が語られている¹⁷⁾。

明けて1946(昭和21年)4月、経済専門学校への復元が決定、工専生の募集は2回で停止となり、1947(昭和22)年3月6日の二回生卒業式、31日の廃校式を最後に姿を消すこととなった¹⁸⁾。



星条旗があがった校庭(1946)

2 和歌山大学の設立（1947～1957年）

1947（昭和22）年、学校教育法が公布され、旧制専門学校の存廃が全国的な問題としてクローズアップされるようになった。和歌山師範学校・和歌山経済専門学校・和歌山医学専門学校それぞれにおいて、師範大学・経済大学・医科大学への昇格について協議が重ねられていたが、文部省における「一府県一大学」の構想が明確化し、合流して大学設立の機運に向った。その後、医専の辞退、和歌山青年師範学校の参加を経て、1948（昭和23）年5月、和歌山新制大学実施準備委員会が結成され、具体的な準備が推し進められた。11月には大学設置審議会委員の現地視察があり、その結果、自然科学関係の図書・標本・機械器具の充実等の勧告があった。大学建設資金の調達には、関係者の努力により多くの寄附金が集められ、1949（昭和24）年5月31日、法律第150号（国立学校設置法）の公布によって、和歌山大学が設置された。

2.1 創設の頃

和歌山大学附属図書館は、1949（昭和24）年5月31日、各校の蔵書及び施設等を引き継いで発足した。当初から、学部図書室制度等は採らず、各校に置かれていた図書課又は図書室の組織を統合の上、学内における一独立部局とした。経済専門学校から引き継いだ経済学部の構内に中央館が、また師範学校和歌山部（旧男子部）から引き継いだ学芸学部の構内に真砂町分館が設置された。発足当時の蔵書数は、中央館 65,892 冊、真砂町分館 41,622 冊、海南分室 8,251 冊、岩出分室 804 冊であった。

師範学校海南部（旧女子部）から引き継いだ学芸学部海南文教場の海南分室、及び青年師範学校から引き継いだ学芸学部岩出分教場の岩出分室は、1950（昭和25）年度限りで、それぞれ真砂町分館に併合された。以後、栄谷キャンパスに新館が建設されるまで、中央館及び真砂町分館の2館による運営が続いた¹⁹⁾。

当時の米田事務長は、当初の4年を振り返り、「敗戦によって占領軍に踏み荒らされた旧経専図書館の残骸を復活するとともに、ほとんど無に等しかった旧師範に真砂町分館として、いくらかでも図書館らしいものを建設する一方、全般的にながめて、図書館人としての教養に乏しい館員の素質を、あらゆる研修の機会を通じて向上せしめることに没頭してきた」と述べている²⁰⁾。

1949（昭和24）年、関西大学に図書館学講習所が設置され、本学図書館からも、昭和25年に1名、昭和26年に2名が派遣され、講習を受けた。講習は毎週土曜日に開催され、公休扱いで、旅費や学費等も大学負担だったという。

2.2 初代図書館長北川宗蔵

初代図書館長は、経済学部教授・北川宗蔵であった。北川は1904（明治37）年に生まれ、神戸高等商業学校を卒業後、1932（昭和7）年に和歌山高商の講師、1933（昭和8）年3月に教授、戦時中には治安維持法により捕えられ、1年7か月を牢獄で過ごした。1946（昭

和 21) 年に復職、1949 (昭和 24) 年 6 月に新制大学が設立され、7 月に初代の図書館長となった。

初代米田事務長は、北川館長の運営方針について、「ひと口でいえば、図書館の部局としての自主独立性の確立と、運営の民主化であった」としている。戦後の劣悪な大学予算のなかで、もともと二つの学校の図書室として発生したものを制度的に結びつけたにすぎない状況にあって、図書館の部局的自主性を確立するということは並大抵の苦勞ではなかった²¹⁾。

『和歌山大学学報』第 5 号 (1953 年 2 月) に「大学と図書館」と題して、北川は下記の通り記した。

大学を構成している各部門のうちで基礎的な部門というものがあると思う。そしてこの基礎的部門にたいしては金と人を重点的に注入するというのでなければ、大学の大きな発展は期待できないと思う。基礎的部門と見るべきものにいくつかあるであろうが、和歌山大学の両学部 of 性質からいって、図書館はこの基礎的部門の一つであると私は確信している。だから私は図書館に金と人が重点的に注入されるべきことを期待し、また図書館建設のテンポは他の基礎的部門とともに他の従属的諸部門の建設のテンポに優先すべきものであると期待してきたのであって、またこの線にそって主張もし努力もしてきたのである。しかしこの主張この努力が、図書館はムリをいう、図書館のセクト主義だといって片づけられているクライがないでもない。この点は私はいつもひそかに心さびしく感じている点である。世の尊敬をうけることのできる高い水準の学問を和歌山大学につくりあげることのみが真に和歌山大学を世にほこることのできる大学たらしめることになるのであると私は思っている。このような高い水準の学問をつくりあげる物的基礎のうちで図書館は最も重要であるということをごここに強調しておきたいのである。

図書館長に就任して 4 年目の 1953 (昭和 28) 年 12 月、北川は 49 歳の若さで脳腫瘍により逝去した。「北川会」が結成されるなど、多くの学生に惜しまれ、翌年の一周忌には様々な催しが行われた。『和歌山大学新聞』第 27 号は、北川教授追悼号としてその模様を伝えている。図書館中央館休憩室では「展示会」が行われ、先生をしのぶ学生、職員ら 800 人余を集めた。遺稿、ノートの種類、蔵書の一部、理解のために作成された 3 間の長さにわたる「理解表」など約 100 点が展示され、神戸高商時代ならびに東京商大時代の研究論文用のノート 32 冊にみられる綿密さ、講義用のノート、講演のための準備メモのたんねんさなどが、学生にも感銘を与えた²²⁾。

北川文庫

北川宗蔵の蔵書や遺稿は図書館に寄贈され、中央館の 1 室に北川文庫が設けられた。1980 年代に北川文庫を訪れた田中照純 (立命館大学教授) は、「薄暗く見るからにあまり人が入

らない部屋の中に、ほこりを一杯かぶった北川の蔵書やノートなどが両側の書棚に置かれていた」と書いている。蔵書には、驚くほど細かい字でびっしりと書き込みがあり、数多くのメモが貼り付けられ、北川がいかにもその徹底した研究姿勢を根気よく維持し続けていたかが伺えた²³⁾。

北川文庫の蔵書は整理され、まとまった形で保管されてきたものの、ノート類は十分に整理されていなかったため、後に「和歌山大学自校史等資料保存活用作業部会」で目録化を行なっている。

2.3 規則

発足後間もない1949（昭和24）年9月25日、「附属図書館運営要綱」を制定・施行した。その第1条において、附属図書館は「両学部から中立した別個の機構」として、その独立性が明確化された。また、「学部的セクト性を払拭する」ことがはっきりと宣言され、そのための条件として、第3条で「経常図書費予算が両学部から中立した一括された金額として配賦を受ける」べきことがうたわれている。

1954（昭和29）年4月1日、和歌山大学附属図書館規則が制定・施行され、これに伴い、附属図書館運営要綱は廃止された。その後、本規則については、1987（昭和62）年9月1日、新附属図書館規則の施行により廃止されるまで、9次にわたる一部改正が行なわれた。

2.4 体制

館長は、発足当初から、中央館の所在するキャンパス内にある経済学部から選出し、真砂町分館と同一キャンパス内にある学芸学部から分館長を選んでいった。1954（昭和29）年3月20日、附属図書館長選考規程を制定・施行し、館長は規程上、両学部どちらからでも選出できることになったが、この慣行は、1963（昭和38）年4月1日から、館長を両学部から1任期（2年）交代で、交互に選出することとなるまで続いた。

事務組織は、中央館9名（事務長・庶務係・整理係・閲覧係）、真砂町分館3名、海南分室2名、岩出分室1名の計15名でスタートし、中央館において、附属図書館全体の運営・企画等を行うほか、全館図書の選択・受入れ、分館・分室用図書の基本カード作成・送達等をも行った。昭和26年3月の両分室廃止以後は、中央館10名・真砂町分館5名の配置とした。

当時、中央館で一括購入した図書は、手書きのカードを添えて、真砂町分館へはリヤカーで、海南分室へは唐草模様の大風呂敷を背負い、半時間のバス路線を使って送達していたという²⁴⁾。

1951（昭和26）年7月、師範学校時代の銃器庫を転用した仮住居から、それより数倍の広さを持つ寄宿舎食堂および炊事場を改装した仮建築に移転、さらに1952（昭和27）年4月には、中央館において行っていた図書購入及び一切の整理を分館で独自に行うこととなった。事務量の増加のため、1953（昭和28）年7月には、「附属図書館運営要綱」の趣旨

に基づいて、北川館長の発案により、両館全員の入れ替えを含む人員の再配置を行い、以後2年を周期に係長以下全館員を対象とした館内定期異動を実施することとなった。

2.5 図書館委員会

「附属図書館運営要綱」第5に基づき、1949（昭和24）年10月25日、中央図書館事務室において、第1回図書館委員会が開かれた。当初の委員は下記のとおりである。

図書館長	北川宗蔵
事務分館長	松下忠
図書館事務長	米田貫眞
経済学部	
経済学系統	金持一郎
経営学系統	尾上忠雄
商業学系統	斉藤利三郎
法律学系統	後藤清
学芸学部	
社会学系統	渡辺廣
自然科学系統	平野稔
教職系統	長沼正巳
芸能・職業・体育	南祐三

委員会の議題は、予算配分や図書の選定にかかる内容が主であったが、同年12月13日に開催された第2回委員会においては、学生の館外貸出に関する要求が審議され、種々意見があったものの、旧来通りこれを許可しないことに決定されている。この他、寄贈図書の設置場所（中央館に置くか分館に置くか）や各種規程の整備等が審議された。

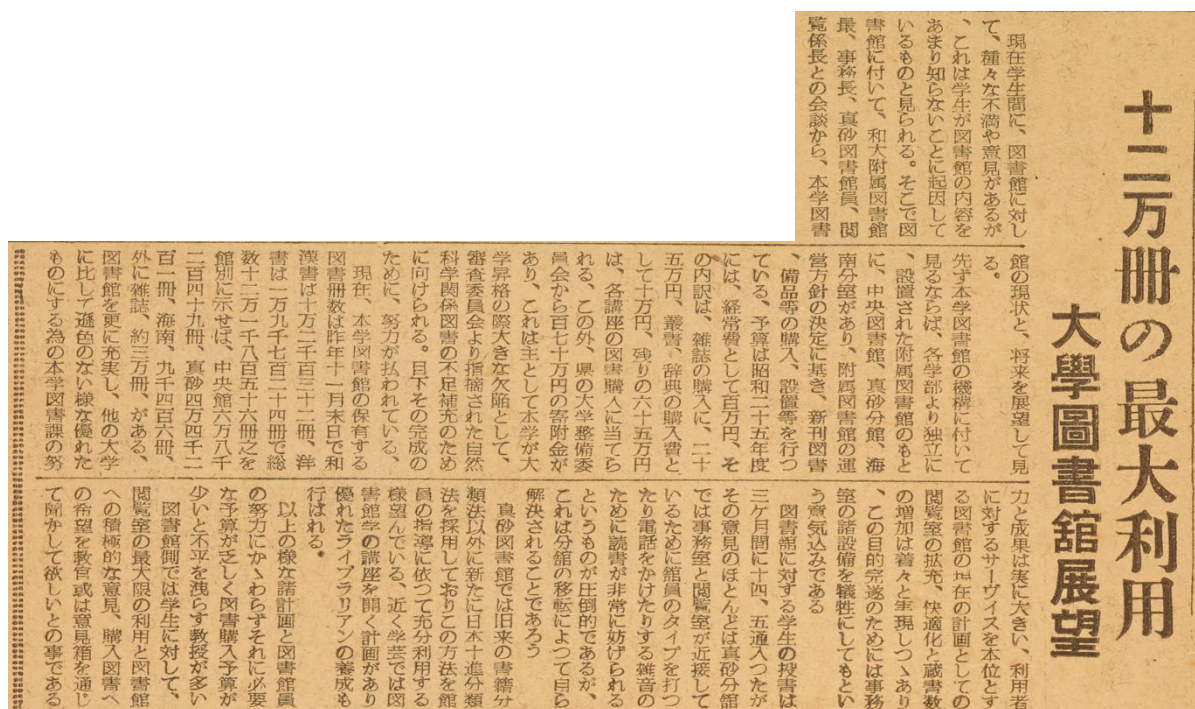
2.6 収書

中央館では、大学に移行するにあたって、新たに設置された科目（経済史関係等）の資料、及び蔵書大系上比較的充実していなかった部門（法律関係等）の基本図書、その他、アメリカの新しい研究成果の資料が要求される科目（経営、会計学等）の図書の購入に努めた。分館では、学芸学部が必要とする広範な部門にわたる急速な充実に迫られ、その中でも、自然科学系統の基本図書として外国雑誌のバックナンバー類、及び外国文学書（特にドイツ、フランス関係）の購入に力を注いだ。

こうして、蔵書数も、発足当時の、中央館 65,892 冊、真砂町分館 41,622 冊、海南分室 8,251 冊、岩出分室 804 冊から、10年後には、中央館 84,922 冊、真砂町分館 62,765 冊へと増加した²⁵⁾。

2.7 和歌山大学新聞に見る当時の図書館

大学創設間もない1951（昭和26）年、学生により『和歌山大学新聞』が創刊された。第1号（1951年2月15日）には、「十二万冊の最大利用 大学図書館展望」との記事が掲載されている。「現在学生間に、図書館に対して、様々な不満や意見があるが、これは学生が図書館の内容をあまり知らないことに起因している」として、附属図書館長等との会談をふまえ、図書館の現状及び展望を解説したもので、予算、蔵書数、図書館側の努力に言及するとともに、真砂図書館では旧来の分類法以外に新たに日本十進分類法を採用していること、近く学芸学部では館学の講座を開く計画があり、優れたライブラリアンの養成も行われること等が述べられている。また、「購入図書への希望を教員あるいは意見箱を通じて聞かして欲しい」との図書館側の希望にも触れられており、学生の意見を採り入れながら図書館の充実を図ろうとしていた当時の雰囲気がうかがえる。



和歌山大学新聞第1号（1951年2月15日）

第2・3合併号（1951年5月25日）には、「真砂町分館の施設漸く成る だが大学図書館としての整備いまだし」として、約80万円を投じた改装工事が近く完成すること、だが中央館及び分室は旧態依然のままであり、蔵書についても洋書合計が19,724冊に過ぎず、少なくとも30万冊以上の洋書を持たなければ充分とはいえないと書かれている。

第11号（1952年12月22日）には、「図書貸出計画中か 大学図書館」として、学生の図書貸出しの要求は今迄何度も繰返されてきたが、恐らく実現は来春からと伝えている。これに加えて、前年度に図書館閲覧室での寒さを痛感した学生の声もあって、図書館側で交渉を進めたところ、高松図書館にストーブ一基、真砂図書館に二基据えられることとな

った。これには約二トンの石炭が充てられる予定で、「これで学生も寒い思いをせず勉強出来ることとなる」とある。

3 中央館、真砂町分館時代（1960～1987年）

1987（昭和62）年9月に栄谷キャンパスの新総合図書館が開館するまで、中央館、真砂町分館の時代が続いた。15名でスタートした職員の定員数は、1966（昭和41）～1967（昭和42）年度の17名をピークに、数次にわたる定員削減等で漸減し、1985（昭和60）年度からは12名となった。蔵書数は、発足当初の116,569冊（中央館65,892冊・真砂町分館41,622冊・海南分室8,251冊・岩出分室804冊）が、昭和61年度末には545,152冊（中央館280,968冊・真砂町分館264,184冊）と約5倍に増加した。

図書の分類法については、真砂町分館はNDC（日本10進分類法）を採用したが、中央館は独自の分類を用いていた。1983（昭和58）年9月27日付朝日新聞には、「図書分類の統合難航」として、大学移転を前に、「分類の整備は、学生に開放されている一部の開架図書雑誌類だけでも五年はかかりそう」という図書館事務長の談話が紹介され、気の遠くなるような話だと書かれている。実際には、新しく購入した図書はNDCにより統一的に分類されたが、移転前の図書の分類は統合されることなく、現在に至っている。

3.1 サービス

学生に対するサービスについて、当初は館内閲覧だけで、閲覧目録で検索して請求する出納方式でスタートしたが、間もなく蔵書の一部について金網越しに展示する準開架方式を採用した。1954（昭和27）年度には、新設の学生用図書を自由に書架に接して選択できる開架方式とし、更に1956（昭和29）年4月の図書館規則（旧規則）の施行と同時に、館外貸出を行うことになった。

1956（昭和29）年度から、併設の経済短期大学の学生に対しても、両学部の学生と同じ資格で利用できることにした。1966（昭和41）年4月、大学院修士課程が設置されたことにより、大学院学生に対しては、自由に書庫に入ることができるほか、大学院学生用図書を設け、貸出期間や冊数等の制限も緩和するなど優遇措置を講じた。

1963（昭和38）年7月、従来試験期間中だけ平日午後7時・土曜日午後5時まで実施していた開館時館の延長を、休業期間を除き年間通じて平日午後9時・土曜日午後5時まで（真砂町分館は土曜日のみ午後5時まで）行うこととした。1987（昭和62）年6月には、「時間外開館実施要領」を制定し、新図書館での実施から、通勤通学バスの都合により、止むを得ず平日の開館を午後8時30分までに短縮した。

1963（昭和38）年度末には、初めて電子複写機を購入し、事務用に使用する傍ら文献複写サービスを非公式に試行したこともあったが、1970（昭和45）年4月に「附属図書館文献複写規程」を制定・施行して、本格的な実施に入った²⁶⁾。

予想以上順調に進む圖書貸出

やはり悩みは予算問題

学生希望の図書貸出がはじめられてから一ヶ月あまり、その間すでに利用も相当数にのぼり、心配された貸出圖書の返還も予想外にうまく行くという喜ばしい結果で、順調に運営されている。我々の図書館をよりよく発展させるために、今一度その現状をみてみよう。

④貸出状況 五月中の学生帯出数は、本館五六六、分館七五二で、これは開館最初の月でもあり、帯出許可証の交付等の関係上、実質的には貸出は五月の半ばから行われた点を考えれば、かなりよい貸出状況といえるであろう。帯出者を学年別にみると、両館ともその数は一年が最も多く、二年三年四年とだんだん少くなっている。部門別に見れば、経済学部ではやはり経済社会方面が多く総数の半分以上

を占め、次に文学となつていてその内容の王なものは、経済部門では岩波の資本主義講座、テイラーの「J.M.ケインズ経済学」その他経済学の入門書等文学では岩波の「文学」、多喜二全集、外国文学ではフランス物が圧倒的に「賈金つくり」「法王庁の抜穴」「罎き門」等ジイドのものが多い。学芸学部では、文学関係が圧倒的で、全集物、日本古典文学などが多いが特徴的なのは中国文学が多いこと。魯迅集や、黄谷柳の「蝦球物語」など、中でも林語堂の「北京好日」は非常によく読まれている。文学については、社会科学と自然科学がほぼ同数となつてゐる。

社会的な勉強の時期とも云えないので、これをもつて直ちに本学の図書利用状況や読書傾向を断ずるわけには行かないだろう。⑤図書費の予算 図書費に関しては、普通他の大学では全体の予算を各学部に分割し、各学部ごとに図書費を出しているが、本学ではこれと異り、全体の予算の中から先ず図書館からの独立の要求により図書費を天引きしその後各学部へ予算を分割する。図書費は学生経費及び教官経費の中から出され、その他文部省から図書費として別に追加して来るものがある。昨年度は、学生経費からは、35%という図書館からの要求に対し、20%の六五四千円が出され、図書費総額は結局三〇五八千円となつてゐる。この予算では教官一人当り一年間で二万円となる。

これは洋書なら二冊程度で、非常に貧弱な予算といわれはなるまい。しかも本学では他の同程度の大学に比して図書費が多い方である事を考えれば、図書費不足の問題は単に学内丈で考えて解決出来ないものである。⑥図書館の悩み 現在の悩みは何よりも館員の不足である。図書館を充実させ、みんなに貸出してフルに利用させると、それ

寸今までより事務が広範囲になるのは明らかで、更に利用を便利にするためには、各種索引カードの作成、その他のサービス等に、館員が多ければ多い程よいことになる。しかし現在の状態ではみんな貸出事務にとられ新本整理などの人員がなくなつてしまつてゐる。このまゝの人数ではいくら図書が充実してもますます館員の過重労働となり

図書館の運営がうまくすゝまな。また、雑誌を整本するのに今とつては年間雑誌で年一九万円、今までにたまつてゐる分では二〇万円位要する。にも拘らず、館員の不足や、整本費用に對してはあまりかえりみられず、どんなに要求しても応じられない。しかしこういふ、いわばかくれた面をも充実させなければ、図書館を本當によくする事は難しいであろう。

⑦学生への希望 図書館からの希望としては先づ、図書館規則をよく守つてほしいという事、また本の盗難、ページの切取り

館内での喫煙、雑談等他人の迷惑を考えない、自分さえよければといつた態度は互いに戒め合つて絶対になくしてほしい。第二にはみんなもつと図書館を利用し、不満や希望を投書したり図書についての相談をもちかけたりしてほしいとの事。

米田事務長は「この様にして学生の図書館は学生自らの手でつばにし、良い伝統を残してほしい。尚、貸出については色々心配したが学生が良識ある態度で期限を厳守されており、非常にうまく行つてゐるのは本當にうれい事だ」と語られてゐる。

紙と文房具

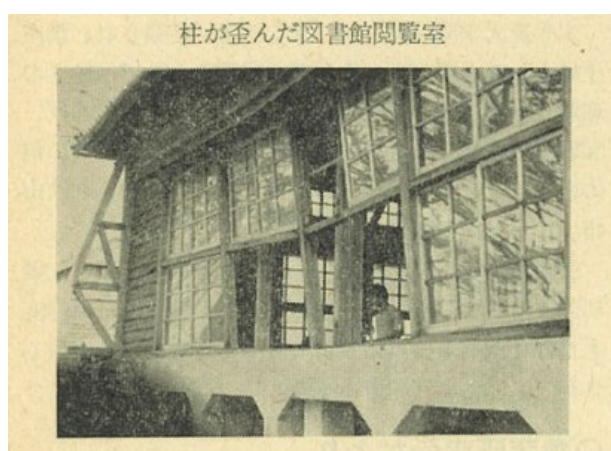
和田紙店

和歌浦高松

3.2 施設・設備

中央館では、発足後間もなく、図書の増加に対応して、第2書庫の積層式書架を従来の2層から3層へと拡張し、1963（昭和38）年度末には鉄筋コンクリート建の第3書庫（積層式3層）を新築した。中央館書庫は、旧書庫と1・2階で床を揃え、両面には増築を容易にする工夫を、各階に換気扇を、窓際にはキャレルデスクを設けた。積層書架も最新型で約4万冊を収容でき、従来、木造建物に配架されていた参考図書、雑誌、新聞を収容する特殊書庫として使用された²⁷⁾。

1964（昭和39年）年9月24日から25日にかけて、台風20号が近畿地方を襲い、図書館閲覧室の柱も歪むなど、甚大な被害を受けた。



（『和歌山大学学報』68号）

1966（昭和41）年度の夏期休業期間中には、閲覧室及び事務室等の全面的な改装工事を行った。中央館は、もともと図書館の専用建てられたものではなく、その半分以上は旧高商時代に教室その他に用いられていたもので、限られた面積と予算の枠内ではひと苦労であったが、改装前とは比較にならぬほど明るく、使いやすくなった。

中央館閲覧座席数 新旧対照表

閲覧室名	改装前座席数	改装後座席数
一般閲覧室	72席	76席
自由閲覧室兼休憩室	16席	16席
雑誌閲覧コーナー	8席	12席
参考図書閲覧コーナー	12席	16席
夜間開館用個室コーナー	0	18席
大学院学生用閲覧室	0	14席
教官閲覧室	2席	6席
計	110席	158席

（『和歌山大学学報第76号』）

和歌山大学新聞第 100 号（1966 年 9 月 22 日）には、今までは壁も暗く、天井も暗く、床は松板であったので大変うるさく、全体的に図書館としては非常にみずぼらしいものであったが、改装の結果、図書館の内部全体が明るくなるよう配慮され、吸音もよくしたので大変静かになる、とある。

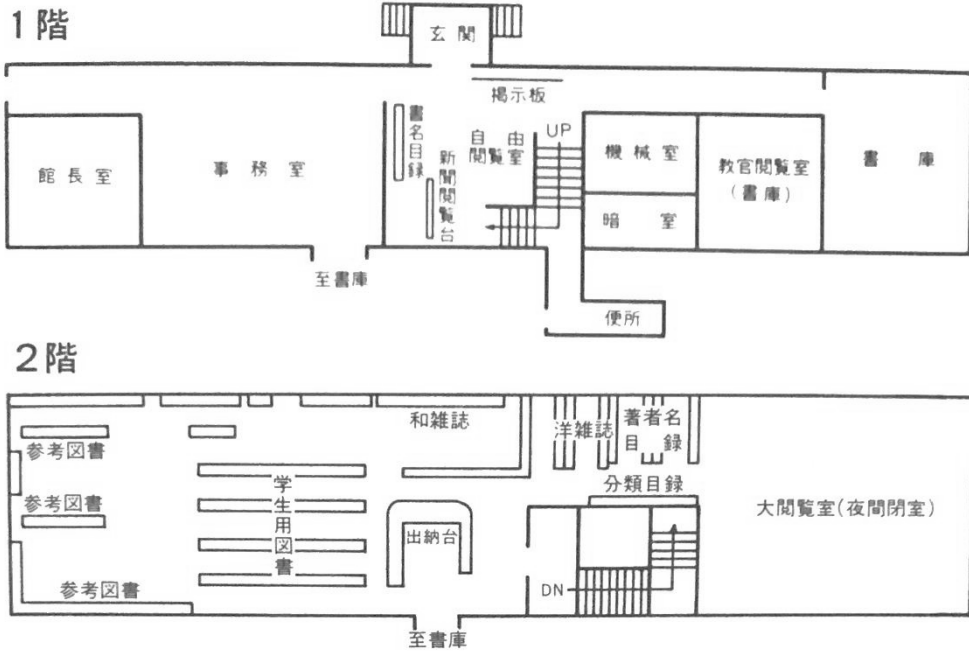
1970（昭和 45）年度末には、プレハブ建の第 4 書庫（積層式 3 層）を新築した。更に、1976（昭和 51）年度末には、教官閲覧室の大部分を書庫に転用し、翌 1977（昭和 52）年末には大学院生閲覧室を改造して第 5 書庫（積層式 2 層）としたが、それでも図書の増加に追い付けず、統合前には書庫内通路など至る所に図書を山積して、動きのとれない状態となっていた。

真砂町分館では、1951（昭和 26）年 7 月、前身校の銃器庫を改造した仮施設から、寄宿舎の食堂と炊事場を改造し建物に移転した後、1961（昭和 36）年度には、旧音楽教室を移築改造して第 2 書庫とし、その一部に閲覧スペースの片隅にあった事務室を移して開架室を拡張した。

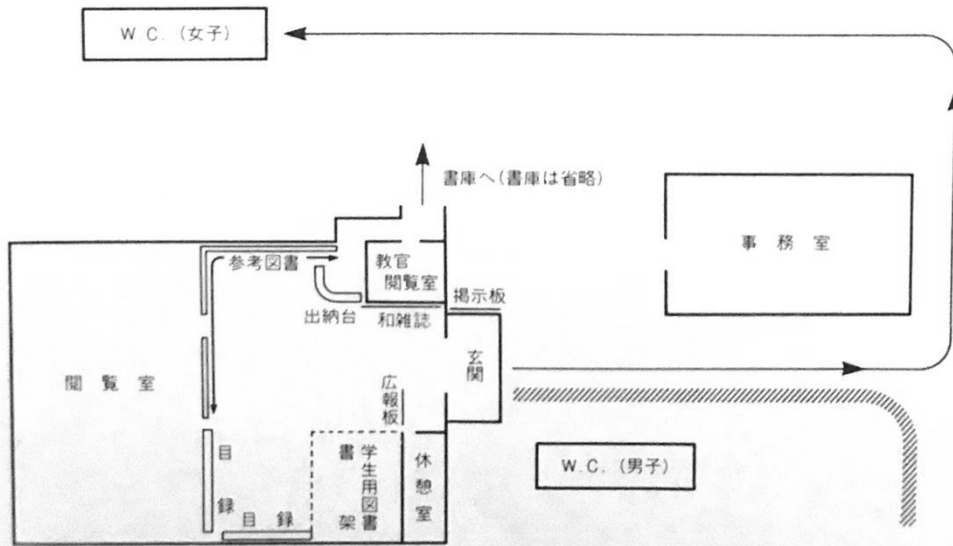
1964（昭和 39）年には、建物全体の傾きを直し、補強をくわえ、天井・壁・床の貼り替えから外部塗装までの改装を施した。内部の模様替えとしては、暖房効果を考えて天井を低くし、台風に備えて窓をせばめるとともに、レファレンス・コーナー、学生休憩室、教官閲覧室を設け、新型書架を取り付けて収容力を倍加させた。暖房設備もガス・ストーブに切り替え、照明と内部塗装に留意し、落ち着いたある部屋とした²⁸⁾。

1967（昭和 42）年度末には、紀州藩文庫等を収蔵するためのプレハブの第 3 書庫（積層式 2 層）を新築した。更に、1977（昭和 52）年度末には、旧学生クラブ室を改造して第 4 書庫としたが、中央館と同様、急激な図書の増加に対応しきれず、移転前には、書庫内至る所に図書が充満して、完全な飽和状態となっていた。

中央館（和歌山市西高松 1 丁目 7-1）



真砂町分館（和歌山市吹上一丁目 4 番 1 号）



図書館利用案内（1985）

4 栄谷キャンパス時代（1987～2009年）

4.1 キャンパス移転、図書館の統合

本学では、教育学部（昭和41年4月学芸学部を名称変更）及び経済学部が共に前身校の施設等を継承したことにより、キャンパスが二つに分かれて大学の運営上不便な点が多かったため、開学当初から一つのキャンパスに統合することが懸案となっていた。その後、統合の気運が次第に高まり、1964（昭和39）年4月の評議会で、第三の敷地に統合整備することを決定したが、諸般の事情により実現を得ないままに推移。1974（昭和49）年1月の評議会で、ようやく両学部及び経済短期大学部を統合整備することの基本方針が決定した。1977（昭和52）年7月、候補地として栄谷地区を選定し、同年12月、文部省において「国立大学統合整備等連絡協議会」を開催し、本学の栄谷地区への移転統合が決定された。この決定により、附属図書館においては、中央館と真砂町分館を統合して新しい図書館を建設し、組織を改革して両館の業務を統合することになった。

1978（昭和53）年7月、学内に学舎移転統合に関する各種委員会を設置し、その一環として、各学部選出教官等から構成された「図書館施設検討委員会」が発足した。同委員会は、30回に及ぶ会議を開いて新図書館の棟計画及び特殊設備計画について原案を作成し、1985（昭和60）年5月、その任務を完了したことにより解散した。

館内においては、1978（昭和53）年1月、新しい図書館像を追求するためのプロジェクトチームを編成し、「新図書館研究会」と名付けて、図書館施設検討委員会に付すべき素案の作成や種々の調査・研究等を行った。作成した図面は施設担当課等にも提出したという。

1980（昭和55）年1月には、新図書館建設後の管理・運営等に関する諸事項について検討し、新図書館運営要綱を作成するため、各学部選出教官等から構成される「新図書館運営要綱作成委員会」が設置された。同委員会は、25回にわたり会議を重ねた結果、新図書館に必要な諸規程等の審議を終え、1987（昭和62）年11月の「新図書館運営要綱」の完成の後に、昭和62年度末に解散した²⁹⁾。

新図書館運営要綱作成委員会

1980（昭和55）年9月16日、附属図書館事務室において、第1回委員会が開かれた。当初の委員は下記のとおりである。

出席者： 中島館長、山田副館長

村岡、倉盛、伊藤、宮本義、小野、竹内、米倉、垣内各委員

（小池事務長、武田、山本、長谷川（書記）各係長）

第1回委員会では、新図書館の運営上どのような問題があるのかについての意見交換があり、これらの議論に基づいて審議事項が整理され、次回以降の委員会で審議が積み重ねられた。

新図書館の建設

新図書館の建設は、大学全体の建設年次計画に従って、教育学部本館棟・一般教育棟とともに、敷地造成工事完了後、最初に実施された。建築工事は、文部省直轄により大臣官房文教施設部大阪工事事務所の担当で行われ、1984（昭和 59）年 2 月に着工し、1985（昭和 60）年 1 月に竣工した。完成された新図書館は、当初「新図書館研究会」で作成した図面や「図書館施設検討委員会」で数次にわたって修正した平面計画図等よりかなり変更されたが、実施設計並びに監理に当たった大阪工事事務所の尽力により、目的に適った満足すべき施設となった³⁰⁾。

1985（昭和 60）年 7～8 月の夏期休業期間中、先ず真砂町分館が教育学部と共に新キャンパスに移転し、9 月から新図書館で分館としての業務を再開した。続いて、2 年後の 1987（昭和 62）年 7 月、中央館が経済学部及び経済短期大学部と共に移転して、先行の真砂町分館と統合し、1987（昭和 62）年 9 月 1 日から新統合図書館が発足した。

4.2 新図書館施設・設備計画

計画を具体化するに当たり、「大学における教育・研究の中核機関としての図書館」の近代化を念頭において、基本的な考え方を下記の通りとした。

- ・分館又は分室を設けない統合図書館とすること
- ・学習図書館機能と研究図書館機能を調和よく兼備すること
- ・キャンパスの中心部に位置するため建物の美観に留意すること
- ・構成については利用者優先を原則とすること
- ・身体障害者の利用について配慮すること
- ・将来の増築用地を確保すること
- ・小人数で効率よく運営できるよう配慮すること

書庫については、蔵書 60 万冊を収容の上、さらに余裕のある閲覧スペースを確保するため、やむを得ず必要棚数の 40%を集密書架として収容能力の増強を図った。閲覧施設については、サービス機能を集中したカウンターを 1 階に設置し、参考図書・雑誌・新聞等を配架するとともに、開架閲覧室・雑誌閲覧室のほかに研究者閲覧室を設けて「研究者主階」とした。2階には学生用図書等を配架する開架閲覧室 2 室とグループ閲覧室 2 室を設けて「学生主階」とした。3 階は管理部門の主階としたが、視聴覚関係諸室等も設けた。また、これらの閲覧施設を快適な環境とするため、空調・家具・インテリア・サイン等にも充分配慮し、空調区画については省エネルギー運営ができるよう 14 分割に細区分した。さらに、身体障害者の利用に備えて、正面入口にはスロープを設けるとともに、ドアは自動とし、エレベーター・トイレ・床等についても配慮した。増築用地についても、書庫及び閲覧室を西側に拡張できるよう確保した。

なお、図書館業務の機械化及び学術情報システムへの参加に備えて、3階に小型計算機を置くための情報処理室を設け、受入・整理用端末3台、貸出用端末1台及び文献検索性端末2台を設置する計画であったが、1988（昭和63）年度概算要求の結果、専用型計算機の導入が却下され、学内に情報処理センターを設置して、図書館業務の処理もその中に組み入れる計画に変わった³¹⁾。

館内壁面の絵画

新図書館の壁面には絵画が架けられた。館報『阿佐毛』創刊号に、山口信郎・教育学部教授が以下のように記している。

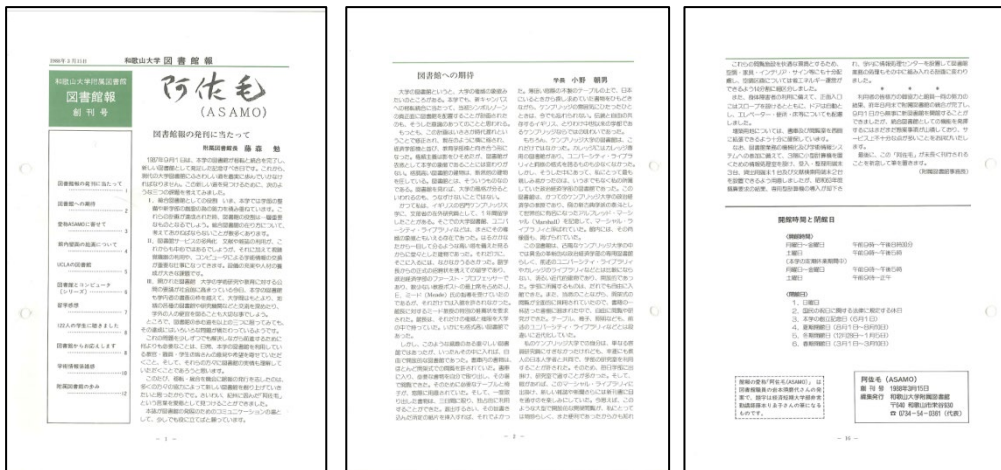
図書館の建設を担当中の大阪工事事務所を訪ねた折、当時の川村所長が重ねて要望されたことは、「図書館のインテリアは適所に絵を配置することによってはじめて完成するので、必ず雰囲気に調和した絵を飾ることを約束してください」と云うことでした。しかし限られた予算で気に入った絵を購入するのは至難なことなので百号の大作は最近の卒業生のなかから優秀なものを実費で寄贈していただき、小品と版画は和歌山に関係のある優れた作家お三方。即ち、現代の日本画壇の抽象画家として第一人者であり版画作品も定評のある村井正誠氏、永年教育学部非常勤講師として御指導いただいた二科会の重鎮松井正氏、日本版画界の草分けであり欧米諸国で永年活躍された泉茂氏、にお願い致しましたところ貧弱な赤面するような予算にもかかわらず、御快諾を戴き立派な作品を御寄贈またはおゆづりいただき感激いたしました。この紙上をお借りしてあらためて卒業生諸君も含めて厚く御礼申し上げます。

なお、絵画を寄贈いただいた卒業生は、向山美好氏（教育学部30期生美術専攻）、高垣（森）千代氏（同31期生）、前田正敏氏（同31期生）であった。

これらの絵画は、その後増築等を繰り返したことにより、現在は当時の壁面には架かっていないが、図書館所蔵絵画展等において大切に展示している。

4.3 図書館報『阿佐毛』の創刊

新図書館発足を契機に、1988（昭和63）年3月、図書館報『阿佐毛』を創刊した。発刊に当って、藤森勉・図書館長は、「現代の大学図書館にふさわしい道を着実に歩んでいくため」に、何よりも必要なことは、「日常、本学の図書館を利用している教官・職員・学生の皆さんの意見や希望を寄せていただくこと、そして、それらの方々に図書館実情も理解していただくこと」であるとして、「図書館発展のためのコミュニケーションの場として、少しでも役に立てば」と述べている。『阿佐毛』は、図書館からの情報提供のほか、教員が自著を語るコーナーや、新入生への読書のすすめ等を掲載し親しまれたが、2001（平成13）年3月刊行の第26号で最終号となった。



図書館報『阿佐毛』創刊号

4.4 電子化・情報化

紀州藩文庫については、長らく教育学部の土蔵に保管されていたものを、文部省の特別予算により、1967（昭和42）年10月からの3年間で整理完了し、1971（昭和46）年3月には冊子目録を刊行した。1972～1974年度には、再度文部省からの特別予算を得て全てマイクロフィルムに収め、1978（昭和53）年10月には「紀州藩文庫利用規程」を制定・施行して、利用に供するようになった。その後、マイクロフィルムの劣化により、2005（平成17）年から翌年にかけて、複製を作成し、現在も利用中である。

一方、目録情報検索の充実を図るため、1996（平成8）年度より、図書館情報化5カ年計画を策定し、1992年以前の図書（約408,000冊）の遡及入力を開始した。また1997（平成9）年5月には、CD-ROMサーバの設置により、「日本経済新聞」等がオンラインで利用可能となり、「朝日新聞記事データベース」「判例大系」等のCD-ROMも取り揃えて、利用に供するようになった。電子ジャーナルについては、1999（平成11）年度、26種の提供を行なった。

業務の電算化については、1987（昭和62）年9月に学術情報係を新設し、1988（昭和63）年6月、NEC PC-9801でNEWSネットワークを利用して、大阪大学経由で文部省学術情報センターのデータベースサービス（NACSIS-IR）に接続し、情報検索の試行を開始した。1990（平成2）年には、情報処理センターのサブシステムとして図書館システム（LUCUS）を載せた日本データゼネラル社のミニコンピュータMV2500/DCを導入し、学術情報センター（NACSIS-CAT）に接続するとともに、閲覧処理をはじめとする図書館業務システムを稼働した。その後、1995（平成7）年には、図書館専用の電算機として、日本電子計算株式会社の図書館システム（LINUS/U）を導入し、1997（平成9）年3月には図書館のホームページを開設した³²⁾。

4.5 図書館の増築

1987（昭和 62）年の統合直後より、書庫の増築要求が行なわれていたが、実現には至らなかった。一方、1997（平成 9）年に設置された「システム情報学センター」の施設整備も急務となっていたことから、図書館とセンターを一体として整備する要求が 1998（平成 10）年度に行われ、合築計画が認められて、1999（平成 11）年 5 月に竣工した。この合築によって、図書館は約 2,300 m²が増築され、約 214,000 冊の収容力増加となった。1 階の閲覧スペースと雑誌閲覧室を改修し、コンピュータを 14 台設置した「マルチメディアホール」と「留学生コーナー」を設け、増築部の 2、3 階には電動式集密書架を設置するとともに、全体で 220 席の増席をおこなった³³⁾。

4.6 地域との連携

1996（平成 8）年 10 月、県内図書館の連携を図るため、和歌山大学の呼びかけにより、「和歌山地域図書館協議会」が発足した。県内の大学・短大・高専図書館および県立図書館を正加盟館、その他の公立図書館を準加盟館とし、事務局は和歌山大学が担った。協議会が実施する事業として、(1)研究会・研修会及び見学会等の開催、(2)図書館関係団体との連絡及び連携、(3)その他必要な事業、が掲げられ、年 1 回の定例会議や事務担当者会において、大学図書館間の相互利用等が検討された。

2001（平成 13）年 10 月、加盟館の蔵書情報共有化、及び県内全域をフォローする利用の枠組みを作るという構想のもと、「和歌山地域コンソーシアム図書館」を設立した。これは、館種を超えて大学、公立、高等学校図書館の蔵書を一括で横断検索できるようにしようとするもので、システムの開発、管理維持は和歌山大学が担った。県内で OPAC を公開している図書館があまりなく、蔵書データをメールで送付してもらい、大学側で取り込む仕組みを作っていた。当時はまだ都道府県内で館種を超えて横断検索できる例は少なく、先進的な取組みであったといえる。しかしながら、「Web 上の仮想の図書館」として、各市町村立図書館を「利用カウンター」に見立て、県内住民が県内全域の蔵書を利用できるようにするという当初の構想は、実際には物流体制が整備されておらず送料負担があることから、現物貸借の実績は伸び悩んだ。その後、OPAC の公開館が増え、利用方法等の見直しも必要であったことから、2016（平成 28）年に諸規定を整理し、新たに「和歌山地域図書館協議会事業実施要項」を策定したことによって、「和歌山地域コンソーシアム図書館」という名称は廃止された。

その他の事業については、2015（平成 27）年から、各館共同によるフォーラムや展示を開催、また和歌山県公共図書館協会と合同で研修会を開催するなど、さらなる連携を模索している。横断検索については、開設後 15 年を経過しシステムの継続が難しくなったこともあり、県立図書館のシステム更新を機に、2019 年 1 月から県立図書館が運営を担うこととなった。

フォーラム・展示

- 2015（平成 27）年 フォーラム&展示「高野山をめぐる歴史と文化」
- 2016（平成 28）年 フォーラム&展示「華岡青洲とその門人たち」
- 2017（平成 29）年 フォーラム「透明人間は可能か？」
展示「和歌山と熊楠」
- 2018（平成 30）年 フォーラム「ゴジラと原子力」
展示「和歌山城天守閣再建 60 周年記念」

5 近年の図書館改革（2010 年～現在）

5.1 和歌山大学行動宣言

2011（平成 23）年 1 月、7 大項目にわたる「和歌山大学行動宣言」が策定され、その第 2 項目として図書館改革が掲げられた。当時の山本健慈学長からみた図書館は、「事務系職員削減のなかで、臨時職員中心に本のお守りをするのが精いっぱい、学生の学びを支援する機能などということ教職員もすっかり忘れていた状況」で、「見るところ図書館自体に変革を担う力はないし、教員のなかでもそれに力を傾注できる人材はいない」ことから、多くの自治体で公共図書館の改革を担ってきた渡部幹雄を図書館副館長に迎えた³⁴⁾。

和歌山大学 2011-2013 行動宣言

国立大学法人 和歌山大学は、2010年4月より第2期中期目標・中期計画に基づいて教育、研究、大学経営を展開しています。

しかし中期目標・中期計画の各項目を達成すれば、どのような大学となるのか、どのように社会への貢献ができるのかのイメージは、必ずしも鮮明には伝わりません。私たちは、大学内部の学生・大学教員、教職員に対して、学外の地域・社会に対しても、いかなるゴールに向けて活動しているのかを、より鮮明に伝えることが必要だと考えます。このため、第2期中期目標・中期計画の課題を凝縮させ、2013年3月までに和歌山大学が達成を目指す、7つの重点課題を設定しました。今後は、この7つの課題の実現を強く意識しつつ、全構成員の参画と協働で第2期中期目標・中期計画の諸課題を総合的に実現するべく大学経営を遂行します。

- I 時代と社会が求める深い教養と、他者とともに問題解決に取り組むことのできる実践力をもつ人間を育てます**
 - 和歌山大学は、学生が子どもから成長するまで「文系専門教育」を重視する方針を堅持し、国際化の促進を図りながら、深い教養と実践力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- II 学生の学習、研究を支援する図書館を目指します**
 - 和歌山大学は、時代と社会が求める深い教養と、他者とともに問題解決に取り組むことのできる実践力をもつ人間を育てます。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- III 和歌山の地域と世界にとって不可欠な農・林にかかわる地域創造支援事業に取り組みます**
 - 和歌山大学は、地域と世界にとって不可欠な農・林にかかわる地域創造支援事業に取り組みます。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- IV 中学生・高校生が憧れと入学への希望をもてる大学にします**
 - 和歌山大学は、中学生、高校生、教員が憧れと入学への希望をもてる大学にします。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- V 同窓会等と連携し学生・卒業生の生涯を支援します**
 - 和歌山大学は、同窓会等と連携し学生・卒業生の生涯を支援します。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- VI 大学構成員のやる気を高め、持続的に自己改革する組織をつくりまします**
 - 和歌山大学は、大学構成員のやる気を高め、持続的に自己改革する組織をつくりまします。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
- VII 次の時代の大学経営を担う人材を養成します**
 - 和歌山大学は、次の時代の大学経営を担う人材を養成します。
 - 和歌山大学は、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。
 - 和歌山大学は、教員が教壇に立つことで、学生が自ら学び、自ら考え、自ら行動する力を育みます。

和歌山大学 2011～2013 行動宣言

和歌山大学 2011～2013 行動宣言（抜粋）

Ⅱ 学生の学習、研究を支援する図書館を目指します

①和歌山大学は、約 70 万冊という蔵書をもち施設的にも優れた附属図書館を有しています。図書館は、学生が生涯にわたって自主的に学び続ける方法を習得し、豊かな学びに裏打ちされた人生を送ることができるように積極的に支援します。

②和歌山大学は、図書館が誰もが集う智への誘いの場として、あらゆるジャンルの豊かな学びに繋がる場となることを目指します。

③和歌山大学は、図書館の職員の体制を整備すると同時に専門的能力の向上を図り、学生・教職員はもちろん全ての利用者の方々の多様な関心に応えられるレファレンスを重視した図書館運営に努めます。

④和歌山大学は、図書館が、学生の知的文化的交流の拠点にふさわしい施設整備と魅力あふれる多様な企画を実現するよう努めます。

5.2 「クロスカル図書館」構想

2010（平成 22）年 10 月、前述の渡部が副館長として採用され（2013 年から館長）、図書館改革がスタートした。渡部が着任した当初の図書館は、書架に入りきらない本があふれ、閲覧室にも箱詰めにした図書が山積みとなっている状況であった。図書館改革は、「資料置き場」と化していた 3 階視聴覚室を整理し、箱詰めになっていた図書のうち約 3,500 冊を本部棟倉庫に一時的に移動させることによって、学生が利用できる空間を確保することからはじまった。



当時の視聴覚室



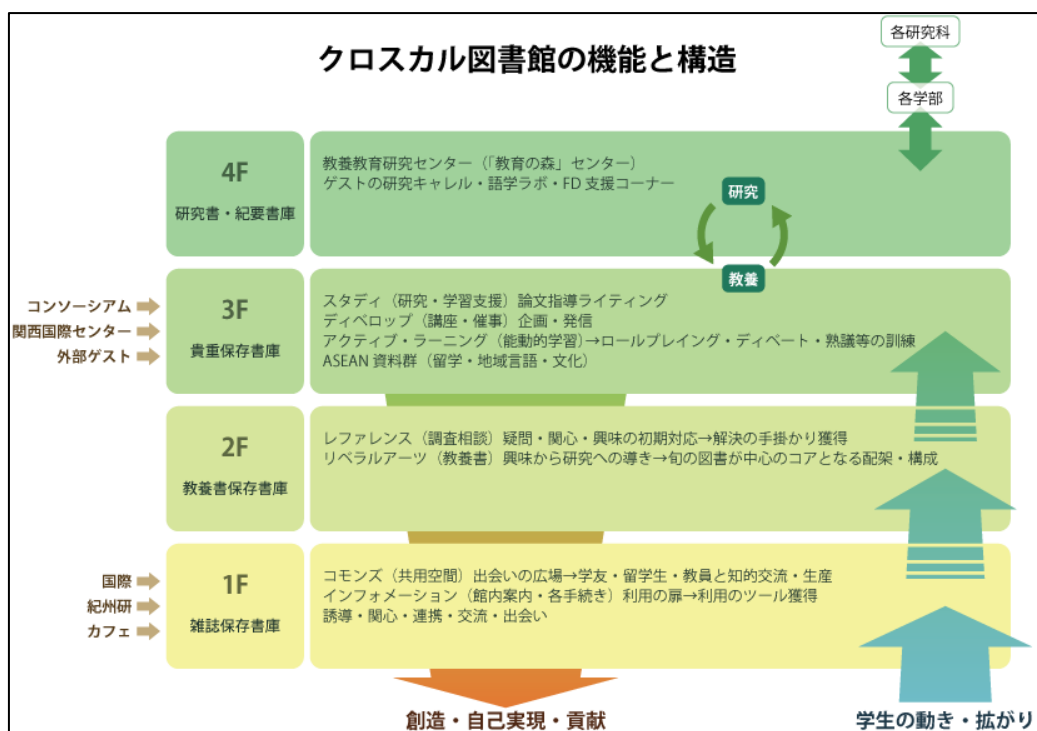
当時の閲覧室の一角

図書館改革の最大の目的は、「和歌山大学行動宣言」に示されているように、学生にとって真に使いやすい図書館を作ることだった。渡部は、国内外の多数の図書館を視察した経験を踏まえて、3 階建の構造を活かしつつ、フロアごとに機能を分担して、利用の段階にあ

わけて回遊しながら階を上がっていくという基本的なイメージを構想した。具体的には、1階を「commons（共用空間）・出会いの広場」と名づけてラーニング・commonsやカフェを設け、2階を「教養の門・知識の交差点」として調査相談や教養を深める場に、3階は講座やアクティブラーニング、論文指導などを行う「企画・発信・交流」の場とするものであった。

これらの構想は、学内で賛同を得て、2011（平成23）年3月には、1階をラーニング・commonsとして整備し、2012（平成24）年1月には2階の一角にレファレンス・コーナーを設置した。また2013（平成25）年1月には、3階にマルチルーム・メディアルーム等を新たに設けた。リニューアルにあたっては、「可視化」をコンセプトとして、学生用のメディアルームだけでなく、3階の館長室もガラス張りにして、学生がいつでも相談しやすいようにした。

これらの実績を踏まえて、「クロスカル図書館構想」を掲げたことにより、平成25年度特別経費（プロジェクト分）の採択を受け、2013（平成25）年1月、図書館の増築が決定した。この「クロスカル」とは、「Cross×Culture」を掛け合わせた造語で、図書館を改革し「教養・文化・国際・地域資源・人材などの『ローカル&カルチャー』が『交流（クロス）』することで、新しい価値が創造される場所へ」という思いが込められている。



クロスカル図書館の機能と構造（2012年作成）

これらの改革を進めるにあたっては、職員の意識を変えることも重要であった。渡部は、毎月のミーティングで図書館の役割について全職員に繰り返し説明するとともに、先進的

なサービスを行なっている他大学の図書館を視察する機会を多く作った。また、2014（平成26）年4月には、職員の公募や他大学との人事交流により、新たなメンバーを加え、さらなる改革を進めていくこととなった。

5.3 新棟（増築棟）の整備

2014（平成26）年10月に念願の新棟が完成、12月9日に記念式典&シンポジウムが開催された。



新棟は4階建てで、1階には「大学史展示室」、4階には「教養の森」センターが入り、2階・3階が図書館スペースとなった。全体のサイン計画は、システム工学部の川角研究室に協力いただき、床カーペットの色合わせから、トイレのサインまで、各階のイメージカラーにあわせ決定していった。

新棟は4階建てで、1階には「大学史展示室」、4階には「教養の森」センターが入り、2階・3階が図書館スペースとなった。全体のサイン計画は、システム工学部の川角研究室に協力いただき、床カーペットの色合わせから、トイレのサインまで、各階のイメージカラーにあわせ決定していった。

■新棟 OPEN 記念式典

2014年12月9日 12:30～

■記念シンポジウム

14:50 学長挨拶

15:00 図書館長挨拶

15:10 シンポジウム

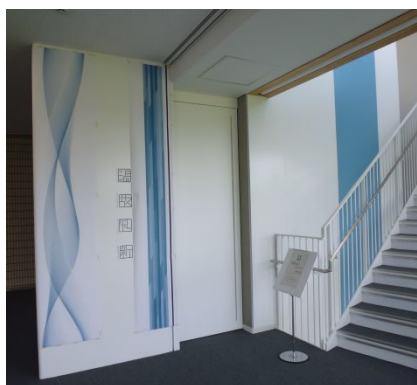
「クロスカル図書館に期待する」

東悦子（紀州経済史文化史研究所）

遠藤史（副学長）

天野雅郎「教養の森」センター長

司会：鯨坂恒夫（システム工学部）



5.4 蔵書整理と配架の見直し

2014（平成26）年当時、箱詰め of 図書は28,000冊を超え、開架スペースのあちこちに置かれていた。また開架図書の配置は、予算区分により「学生用」と「開架用」に分かれ、それぞれの分類が2階と3階に分散している状態で、目的の本を探すのも一苦勞であった。さらに、雑誌のバックナンバーが、年度ごとにタイトル順に並べられている等、全体として大幅な見直しが急務となっていた。

新棟の完成により、ようやく配架の見直しができるようになり、翌 2015（平成 27）年 1～3 月の間に、「学生用」と「開架用」を一本化し、分類 000 から 999 までの順番に並ぶように全面的に並べ替えた。

一方、重複図書の除籍を開始した。過去に、学内で除籍に異論のあったことから、長年の間、蔵書整理がおこなわれておらず、箱詰め図書が増える一方となっていた。そこで、まず図書館企画運営委員会において、重複図書の除籍について承認を受けた上で、除籍候補図書リストを学内教員に公開し、希望のあった図書については除籍しないこととして、慎重に進めていった。初年度となる 2014（平成 26）年度は、3,140 冊の本を除籍し、以後は毎年選定対象を変えて、順次整理を進めている。

2015（平成 27）年には、紀要を 1 階から 3 階に移動し、参考図書の並べ替えを行ったほか、新棟 2 階、3 階の一室にそれぞれ「紀伊半島関連資料」「熊楠・和歌山の先人たち」のコーナーを設けた。また、既存棟 3 階には「和歌山大学コーナー」として大学刊行物や教員の著書を並べた。これにより、2 年をかけた資料の再配置がようやく完了した。

除籍した図書の活用方策として、2017（平成 27）年 10 月には、初めての「蔵書リユース市」を開催した。約 3,000 冊の図書を 1 冊 100 円で販売する催しは、メディアでも取り上げられ、一般の方も含め多くの方で賑わった。以降、この「蔵書リユース市」は、毎年恒例行事となっている。



「蔵書リユース市」の様子

5.5 資料保存体制の見直し

2015（平成 27）年 5 月、3 階書庫でシバンムシが大量発生した。閲覧室だけでなく書庫にも、図書が箱詰めにされたり、直接床に積まれていたことから、カビ被害等を懸念し専門業者に調査を依頼したところ、発見されたのである。黒ゴマのような虫が大量に床を這い、壁をつたうという状況で、資料を 1 冊持ち上げてみたところ、100 匹以上のシバンムシがバラバラと落ちてくるような状態であった。

被害の大きい資料の封入、ライトトラップの設置等の緊急対応をおこなうとともに、専

門業者に委託し、最も被害の大きかった電動書架の資料 7,828 冊を搬出して、燻蒸及びクリーニングを行なった。次いで、書庫 3 階には約 19 万冊の資料があり、被害が書庫全体に広がっていたこと、また他の階の被害も懸念されたことから、書庫資料全てについて、職員による目視点検を実施した。点検の結果、書庫 2 階、3 階の広い範囲にわたり、食害図書が発見された。図書を持ち上げると、棚に黒い砂状の粉がびっしりついている等、食害が進んでいるものも多く、成虫の死骸も各所で発見された。特に被害が大きかったのは、旧中央館（経済学部）から引き継いだ洋書だった。この時点で、被害は約 2,000 冊にのぼり、隔離できるようなスペースがなかったため、ジップロックに封入して元の書架に置いていた。これらの図書は、点検が全て終了した段階で、燻蒸を行った。その後、木川りか・博物館科学課課長（九州国立博物館）を迎え、資料保存に関する研修会を開催し、職員の IPM 管理に対する知識向上に努めた。図書の点検及び棚の清拭を継続する等の対策を進めた結果、発生から 3 年目となる 2017（平成 29）年には、ライトトラップで捕獲した成虫が、4～9 月の間で 1 匹となり、地道な対策が実を結びつつある。

当初は業者による燻蒸を実施していたが、虫害が懸念される図書が多いため、他の殺虫方法を検討した。薬剤を使わず、職員で実施できること、また費用面を考慮し、低温殺虫法（冷凍）を導入することとし、2016（平成 28）年、 -30°C まで冷える冷凍庫を購入し、職員による殺虫処理を継続している。

一方、マイクロフィルムについても、劣化が大きな課題となっていた。温度管理ができるように、2012（平成 24）年に改装された倉庫をマイクロ資料室として多くのフィルムを保管してきたが、予想以上に劣化（ビネガーシンドローム）が進行したことにより、2016（平成 28）年 9 月に空調が故障し、早急な対策が必要となった。専門家の助言を受け、フィルムベース調査、劣化度の測定、劣化が進行したフィルムの廃棄を 1 か月間で実施した。

5.6 学生との協働

図書館改革においては、学生の図書館運営への参画も大きな目標の一つであった。2015（平成 27）年 2 月に、ボランティアで図書館の仕事をする「学生サポーター」を募集し、4 月から 11 名の学生による活動がスタートした。月 1 回の返本・書架整理作業に加え、学生選書ツアーを開始し、MARUZEN&ジュンク堂梅田店にて学生の視点で本を選んだ。「学生選書 47」「書架で見つけた輝き」といった企画展示により、図書館入口は活気を感じられるコーナーになってきた。2016（平成 28）年には新たにオープンキャンパスでの図書館ツアーを開始し、高校生たちにも大変好評だった。2016（平成 28）年には、徳島大学に出向いて学生交流会を実施したり、2017（平成 29）年には、和歌山県立医科大学図書館のサポーターを迎え交流するなど、他大学の活動にも刺激を受けている。

一方、学生による学修支援を図るため、2015（平成 27）年 10 月から、ラーニング・コモンズにおいて、大学院生による「ラーニング・アドバイザー（LA）」の配置を開始した。LA のメンバーは、情報検索等の研修後、学生からの相談を受けるとともに、2016（平成

28)年にはパスファインダーを作成、2017(平成29)年にはビブリオバトルを開催したり、2018(平成30)年には自分たちが選んだテーマでミニ講習会を開催するなど、活動の場を広げている。



学生サポーターによる展示作業



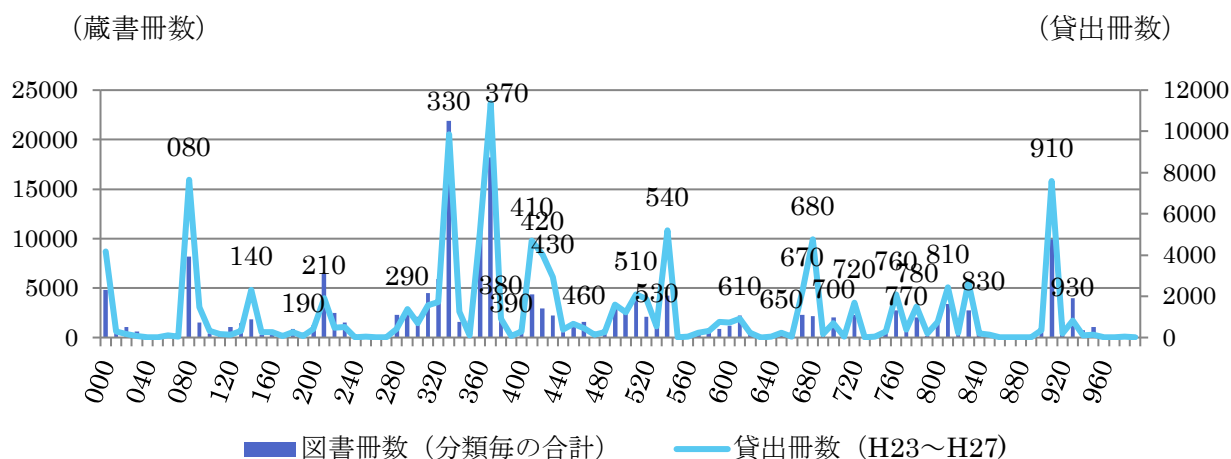
LAミニ講習会

5.7 資料の選定

2013(平成25)年当時、図書費は研究用、学生用に区分されていたが、学生用についても図書館職員の選定枠は設けられていなかった。全体として、更新されていない分野がみられ、改訂版の不補充など改善すべき点があったため、図書館企画運営委員会で審議のうえ、翌年より図書館職員選定枠を設け、蔵書のバランスに留意することとした。

また、図書館規程には「購入図書の選定要領は、別に定める」とされていたにもかかわらず、明文化されない状況が続いていたため、2016(平成28)年度に「資料収集方針」、「学生用図書選定基準」を策定した。あわせて、学生の学習環境を向上させ図書館利用を増加させるため、利用分析を行い、資料整備計画(5カ年)を策定した。

統計データによる分析では、雑誌、電子ジャーナル、データベース経費の増大にともない、図書資料費が著しく減少している状況が確認できた。学生一人あたりの図書受入冊数及び図書資料費は、国立大学の平均を大きく下回っていた。また、蔵書構築状況と貸出状況を見ると、蔵書構成は分野のばらつきが大きく、利用状況と合致していない分野が見られた。



■蔵書に比べ、利用が多い分野（例）

000＝総記（007＝情報学含む）、080＝文庫・新書、140＝心理学、290＝地理、410～430＝数学・物理学・化学、520＝建築学、540＝電気・電子工学、590＝家政学・生活科学、680＝運輸、交通（観光学含む）、810＝日本語、830＝英語、910＝日本文学

以上のような状況を検討した結果、学生の学習環境の充実・改善のため、次の5つが課題として挙げられた。

1. 全般的な資料費の維持・増加策を検討すること
2. 学生利用が盛んな図書の充実をはかること
3. 授業開講分野の図書の充実をはかること
4. 広く教養を涵養する基礎的な学術資料を収集し、蔵書のばらつきを是正すること
5. 中期計画中期目標に掲げる大学の目標に沿った資料（例：地域資料）の整備、充実をはかること

上記の課題を達成するために、学生用図書整備計画（2017-2021年）では、基本計画とともに、重点的に収集する分野を年度ごとに定め、計画的な資料収集を進めている。

5.8 資料・情報へのアクセス改善及び計画の策定

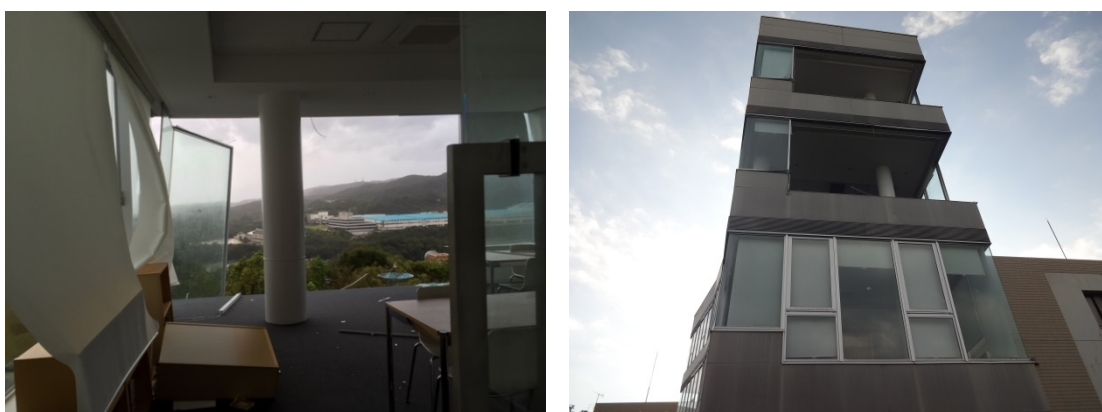
資料のデジタル化については、公益財団法人図書館振興財団の助成を受け、2015（平成27）年から3年間、紀州藩文庫（うち郷土誌料）等のデジタル化を行い、2016（平成28）年から順次公開を開始した。

オープンアクセスの推進については、2018（平成30）年にリポジトリのシステムを更新した（Earmas version 3）。また、学内刊行物を網羅的に公開できるよう、さまざまな働きかけを強化するとともに、「オープンアクセスウィーク」（10/22-10/28）には全学に向けて広報を行なった。図書館ウェブサイトについては、2015（平成27）年4月に、ページ構成

等を全面的に見直してリニューアル公開し、2016（平成 28）年 11 月には英語版サイトを追加した。2018（平成 30）年 10 月には、「図書館ウェブサイト更新ガイドライン」を策定し、お知らせの形式を統一する等、より見やすいサイト作りを心がけた。そのほか、2018（平成 30）年 5 月には、LA による図書館ツアー動画を公開し、新入生等に案内した。9 月には、図書館システムのリプレイス（NEC E-CatsLibrary Ver.6）を行ない、OPAC の機能強化等を実現した。

また、学生の図書館に対する様々な意見や要望を把握し、図書館サービスの向上につなげるため、2017（平成 29）年 10 月 16 日～11 月 17 日に、全学生（約 4,500 名）を対象にアンケートを実施した。その結果をふまえて、2018（平成 30）年 3 月に「図書館機能向上計画」を策定、また 12 月には「図書館設備の整備計画」を策定した。購入希望図書制度の利便性向上や、新たに「サイレント・ゾーン」を設置する等、学生の視点に立ったサービスの向上に努めている。

施設面においては、2018（平成 30）年 9 月に上陸した台風 21 号により、新棟 3 階の窓ガラスが落下する等の甚大な被害があった。幸い、人的被害及び資料被害ともになかったが、今後も同様の災害が起こりうることを踏まえた施設整備が求められる。



窓ガラスの被害状況

5.9 紀州材を使用した図書館家具の研究

和歌山県は県土の 77%を森林が占め、利用可能な資源は成熟している（和歌山県ホームページ/2018 年 12 月 6 日確認）ものの、十分に活用されているとはいえない状況がある。そのような現状を踏まえ、池際博行・前図書館長、渡部幹雄・図書館長、県内木材加工業者の共同研究として、県関係部局とも協力し、2015（平成 27）年より、図書館家具に適した書架等の開発を進めてきた。家具のコンセプトは、紀州材の木目を活かし、図書館家具としての耐久性を備えたもので、角のない丸みのあるデザインとしている。開発された家具は、図書館内で使用するとともに、経済研究所図書室（学内）や、九度山町「くどやま森の童話館」に設置される等、活用が広がっている。



図書館紀伊半島関連資料コーナー



くどやま森の童話館 (photo by d.hidaka)

5.10 大学史資料室の設置

前述の『和歌山大学 2011～2013 行動宣言』において、「自校の伝統を掘り起こし、自校史学習プログラムを編成して教育課程に組み込むことにより、自校への誇りを醸成」することが掲げられ、2012（平成 24）年 7 月に「自校史等資料保存活用作業部会」が設置され、その事務局が図書館と同じ学術情報課に置かれた。作業部会において、自校史関係資料の収集、常設展示パネルの作成等が進められ、2015（平成 27）年 7 月には、図書館新棟 1 階に大学史展示室が設置された。

一方、収集した資料については、目録化を行ってきたものの、作業部会でさらなる活用を図ることは困難であったため、2018（平成 30）年 10 月、大学図書館の下に大学史資料室を設置した。専任職員不在の状況には変わらないが、閲覧希望等にも対応している。

おわりに

本稿では、前身校の時代から近年の改革まで、100 年近くとなる図書館の歴史を概観した。本学では、2000（平成 12）年に『和歌山大学五十年史』が刊行されたものの、図書館史はこれまでまとめられてこなかった。職員の異動等により、10 年前のことも経緯が分からなくなってしまうことも多い。近年の改革において図書館内部も大幅に変わっており、まだ記憶に新しい現時点において記録に残す必要を感じ、作成に至ったものである。当時の状況を知るため、大学設立間もない 1950（昭和 25）年から勤務され、新図書館建設時には事務長として移転統合を指揮された谷口宏之氏にインタビューを行ない、貴重なお話を伺うことができた。執筆にあたっては、可能な限り過去資料を確認したが、記録にないものも多く、不十分な点が多い。今後の加筆・修正を期したい。

参考文献

- 1) 和歌山大学 50 年史編纂委員会『和歌山大学五十年史』 和歌山大学 2000 年
- 2) 和歌山県史編さん委員会『和歌山県史』近現代 1 和歌山県 1989 年
- 3) 和歌山縣師範學校同窓會『和歌山縣師範學校創立五十周年記念號』 1926 年
- 4) 3 と同じ
- 5) 和歌山大学教育学部『100 年のあしあと』和歌山育英舎 1975 年
- 6) 和歌山縣師範學校校友會『會誌』17 号 和歌山縣師範學校校友會 1923 年
- 7) 和歌山縣師範學校校友會文藝部『會誌』25 号 和歌山縣師範學校校友會 1932 年
- 8) 1 に同じ
- 9) 5 に同じ
- 10) 藤本清二郎「『紀州藩文庫』の構成と国学所の蔵書」(『紀州經濟史文化史研究所紀要』
13 紀州經濟史文化史研究所 1993 年)
- 11) 和歌山高等商業学校『和歌山高商十年史』 和歌山高等商業学校 1933 年
- 12) 三上隆三「和商商業・和大經濟学部 図書館物語(2)」(『柑芦』16 号 和歌山大学經濟
学部柑芦会 1986 年)
- 13) 11 に同じ
- 14) 12 に同じ
- 15) 11 に同じ
- 16) 和歌山大学『和歌山大学十年の歩み』 1959 年
- 17) 柑蘆会大阪支部『柑蘆』13 号 1983 年
- 18) 16 に同じ
- 19) 1 に同じ
- 20) 和歌山大学庶務課『和歌山大学学報』第 5 号 1953 年
- 21) 米田貫真「北川先生」(『命燃えて』北川啓子 2004 年)
- 22) 『和歌山大学新聞』第 29 号 1955 年
- 23) 田中照純「北川宗蔵」雜感」(『命燃えて』北川啓子 2004 年)
- 24) 和歌山大学附属図書館『阿佐毛』第 9 号 1992 年
- 25) 16 に同じ
- 26) 和歌山大学附属図書館『阿佐毛』第 1 号 1988 年
- 27) 和歌山大学庶務課『和歌山大学学報』第 67 号 1964 年
- 28) 和歌山大学庶務課『和歌山大学学報』第 70 号 1965 年
- 29) 30) 31) 26 に同じ
- 32) 33) 1 に同じ
- 34) 山本健慈『地方国立大学一学長の約束と挑戦』 高文研 2015 年